

『社会学評論』日本社会学会 68 卷 3 号 2017 年 12 月 442-443 頁.
ジョン・L・ルーリー, シェリー・A・ヒル著 (倉石一郎・久原みな子・末木淳子訳)
『黒人ハイスクールの歴史社会学——アフリカ系アメリカ人の闘い 1940-1980』
(昭和堂, 2016 年, A5 判, 332 頁, 3000 円)

本書は、アフリカ系アメリカ人（以下黒人）のハイスクールをめぐる黒人・白人・行政の政治・社会史を叙述し、その中で、アメリカの公正・正義について考察している。評者は、アメリカの教育について疎い者である。本書に、もう一つの黒人解放の歴史を学んだ。本書は、南部の黒人がハイスクールに出会う黎明期の 1940 年代から、北部都市でハイスクールの問題が噴出する 1970 年代を対象に、2 つの方法により、黒人とハイスクールの歴史を叙述している。一つ、黒人ハイスクールの設置からハイスクールの人種隔離撤廃までの歴史を追い（時間軸）、同時に、南部・北部・西部、農村・都市・郊外におけるその展開を追って（空間軸）、黒人とハイスクールの全体史と地域史を叙述している。二つ、膨大な史料の間にオーラルヒストリーのデータを挟み、ハイスクールに在籍した人々におけるハイスクールの現実を分析し（質的方法）、同時に、国勢調査結果のロジスティック回帰分析により、ハイスクールの黒人の在籍率・学業達成度・卒業率に及ぼす家庭要因（ひとり親、貧困、親の学歴）、居住地の影響を分析している（量的方法）。本書の訳者らは、これを歴史社会学と呼んでいる。

本書は、I 部で 1940 年～1960 年代の、南部での黒人のハイスクール設置、教育条件の改善、人種隔離学校（「分離すれど平等」）、真の平等への運動（「隔離は本来的に不平等」）、平等の困難、黒人の北部・西部移動、都市移動等について、II 部で 1960 年代後半～1970 年代の、黒人集住地区、学校の過密、白人の脱出と隔離学校、郊外のハイスクール、ひとり親家庭、貧困、ドロップアウト、人種隔離撤廃の闘争、インナーシティの底辺黒人等について論じている。そこには、中等教育の機会の獲得に向けた黒人の願望と努力、白人の差別と暴力、絶望にも近い人種統合の夢の壮大な物語がある。この話に評者は、近代広島^の被差別部落の小学生が、一般校での厳しい差別を逃れて部落学校へ移ったが、部落学校への差別の烙印が強く、ふたたび一般校へ移ったという苦難の歴史を想起する。他方、アメリカには、黒人を嫌う白人の焦燥と無念を後目に、黒人が中等学校の教育機会を拡大し、ハイスクールの在籍率・学業達成度・卒業率を高め、白人との格差を縮めていく不可逆の歴史がある（1965 年に、本格的なアファーマティブ・アクションが始まった。それは教育でも実施されたが、そのハイスクールへの影響は、大きかったと思われる）。それは、黒人の努力と闘いの賜物であった。そこでは、L・ウォーナーのコミュニティでさえ（同書 109 頁）、アメリカ都市の例外にみえる。

黒人の学校史の中で、なぜハイスクールなのか。本書に、ハイスクールの 4 つの位置が

みえる。一つ、ハイスクールは、初等教育と高等教育を橋渡しした。ハイスクールの現実には、初等教育の結果であり、高等教育の前提であった。そこで、黒人の教育の全体がみえた。二つ、ハイスクールの生徒は、白人も黒人も、近代的工業の雇用労働者の主力になった。黒人のハイスクール卒業は、黒人の願望であっただけではなく、その労働力を必要とする資本の要請でもあった（ハイスクールの卒業生は、どんな仕事に就いたのか。つまり、労働市場のどの部分に入ったのか。その統計データが示されると、黒人の卒業生が増えた社会経済的な背景がより明確になった）。三つ、ハイスクールは、黒人の地位上昇の跳躍台であった。また生徒は、階級の予備軍であった。そこには、カレッジへ進む未来の中産階級から、ドロップアウトして街頭へ行く未来の底辺階級までいた。四つ、ハイスクールの生徒は、荒廃した学校の現実、その社会的背景、不公正・不正義が理解できる年齢にあった。1960年代後半、ハイスクールは、カレッジに続いて、黒人が誇りを覚醒し、不公正・不正義と闘う政治学校になった。種々の解放イデオロギー（ブラック・パンサーを含めて。同書 160 頁）が、その動力となった。

最後に一言。黒人は、中産階級・労働者階級・底辺階級へ分化した。都市では、富裕黒人と貧困黒人がときどき対立した。白人も同じであった。この現実には、ハイスクールでどのように現れたのか（生徒の出身家庭の社会的地位への言及はある）。黒人对白人とともに、富裕／貧困、黒人／白人の階級・人種関係も、ハイスクールの政治に錯綜した影響を与えたと思われる。その話が本書に続くのだと思う。ついでに、本書で言及される W・ウィルソンは（同書 227 頁）、人種より階級を強調したが、著者らは、人種を強調する立場にあると思われる。

本書に「ないものねだり」はある。しかしそれをせずとも、ハイスクールの黒人の苦悩と喜び、白人の焦燥と無念、公正・正義の希望と絶望のリアリティの描写において、本書が重厚で秀逸の著作であることは、間違いない。